

# 自分らしさを発揮し仲間と楽しめる授業の研究

## —小学校外国語における CLIL の活用を通して—

村山 愛実(21048)

### 1. はじめに

令和2年度より小学校中学年から週1時間の外国語活動、高学年では週2時間、外国語が教科として導入された。令和3年度全国学力・学習状況調査によると、「英語の勉強は好きですか」という質問に、「好き・どちらかと言えば好き」と答えた小学生は68.4%だった<sup>1)</sup>。多くの児童が英語学習に肯定的な一方で、約3割の児童は、4年間の学習で、既に苦手意識を抱いているとも言える。

この実態に対して、学習と使用を別ものとして捉えるのではなく、相互補完的で相乗効果の期待できる関係であると考えている指導法「CLIL(内容言語統合型学習) (Content and Language Integrated Learning の略称) に注目した<sup>2)</sup>。

### 2. 研究の目的

本研究は、英語を他教科と連携させながら学習者の協働的な学びを重視している CLIL の授業をデザインし、一人一人が自分らしく参加する中で生まれる学びを価値付けていくことを目的とする。

### 3. 研究方法

#### (1) 4つのCを活用したデザインと実践・分析

CLILの特徴に4つのC(4Cs)があり、これはContent(科目やトピック)、Communication(言語知識やスキル)、Cognition(様々なレベルの思考スキル)、Community/Culture(協学、異文化理解、地球市民意識)を指す。

和泉<sup>2)</sup>によると、4Csの関係を、内容(Content)があるからこそ、伝える手段としての言葉(Communication)を必要としたり、思考(Cognition)の広がりや深まりが増したりする。さらに、他者との交わり(Community)があるからコミュニケーションが重要になる。4Csはそれぞれが柱となり、互いに支え合って存在しているため、教育の質の向上を掲げるCLILの重要な指針であるとした<sup>2)</sup>。

本研究は4Csの中でも、特にContent(内容)とCognition(思考)に注目したデザインや実践、分析を行った。

#### (2) 自分らしさが発揮される内容の設定

和泉<sup>2)</sup>はCLILの授業でも、言語不安が全くなくなるわけではないが、従来の形式重視の授業と比べると、言語不安はかなり和らげられると期待する。CLILでは、言語と内容に焦点を当てるため、必ずしも言語能力が高くない生徒でも、内容面に興味や強みがあれば、CLILの授業で十分に学んでいけるからである<sup>2)</sup>。

また、CLILでは、ペアやグループ活動も多く、必要なら他者の力を借りたり、力になってあげたりして、お互いへの理解や尊重の心を深めていける<sup>2)</sup>。

本研究ではContentの設定にあたり、現在、宮城県や仙台市で採用している3~6年生の外国語教材や教科書を單元ごとに、関連のある既習内容を組み込み学習内容とした。特に高学年は、單元終末の『Over the Horizon』で教科横断的な学習が必ず2時間設けられており、CLILの考えが反映されている。単元の多くは複数の教科と関連付けられるため、学習目標と子どもの実態や学級の状況、学校の特色に合わせ、興味や関心、自分らしさが発揮されるように、内容を検討した。

#### (3) CDFsによる多様な思考の価値付け

児童が学習の中で働かせている様々な思考を、教師が認識し、学びとして価値付けていけるように、Puffer<sup>3)</sup>のCognitive Discourse Function(以下CDFs)「認知的談話機能」を用いて、思考(Cognition)を評価した。

Puffer<sup>3)</sup>は、CDFsは人間が知識の学習、表現、交換を目的として、認知した内容を処理するときに必要なとするパターンであるとした<sup>3)</sup>。

表は左の列が会話の意図や機能を表し、右はそこで価値付けできる思考の要素を示したもので、Puffer<sup>3)</sup>と柏木<sup>4)</sup>を参照して、独自にまとめたものである(表2)。デザインでは子どもの発言を表の機能から予想し、分析でどのような思考の要素が生まれたのかを考察した。

表2 CDFsと思考の要素

| 機能         | 要素                           |
|------------|------------------------------|
| CDF 1 分類する | 分類,比較,対比,結び付け,構成,類別,包含       |
| CDF 2 定義する | 定義,同定,解釈,特定,特徴づけ             |
| CDF 3 描写する | 描写,ラベルづけ,同定,名づけ,明細化          |
| CDF 4 評価する | 評価,判断,意見を述べる,賞賛              |
| CDF 5 説明する | 説明,理由,表現,原因/結果,指摘,結論,結果からの推測 |
| CDF 6 探求する | 探求,仮説,推測,予測,見当,仮定,他の視点に立つ    |
| CDF 7 報告する | 報告,情報提供,詳述,語り,発表,要約,関係付け     |

#### 4. 研究成果

実践は、仙台市 A 校 3 年生、5 年生、仙台市 B 校 5 年生を対象に授業を行った。それぞれの授業の分析で、【視点 1】学習への参加の保障、【視点 2】思考の広がりや深まり、【視点 3】円滑な英語への接続が成果として挙げられたが、今回はその中でも特に特徴的に表れた成果について分析・考察する。

##### 4.1 実践 1 のデザインと分析【視点 1・3】

仙台市 A 校 3 年生 1 クラスを対象に Let's Try! 1 Unit 7「This is for you」(5 時間)の授業を行った。休み時間にお絵描きを楽しむ児童が多く、教室には児童の作品が多数飾られていたことから、一人一人の考えや思いを色や形で表現し、単元目標であった、形の言い方に慣れ親しめるようにデザインした。4Cs との関連については表にまとめた(表 3)。

表 3 本時の授業と CLIL の 4Cs との関連

| 4Cs                 | 内容                                    |
|---------------------|---------------------------------------|
| Content             | 算数(図形)・図工(造形遊び)                       |
| Communication       | 色・数・形などの表現を使ったやり取り                    |
| Cognition           | 三角形で正方形や長方形などを作れることを知り、自分の作りたい形を創作する。 |
| Community / Culture | 作ったものを見合うグループ活動                       |

##### 【視点 1】学習への参加の保障

児童 A は言いたいことがあると、授業中でも担任の傍に行って話をするような児童である。これまでの授業でも、挙手や発言をしたことはない A に、その日は導入の場面で、変化が見られた。「直角三角形で正方形は作れるか」という発問をした際、たくさんの児童の挙手の中に、A もいた。さらに「別の作り方もある」という声上がり、先程よりも少ない挙手の中に手を挙げたり下がりたりしている A がいた。A は図形が得意なようで、その後のお題を与えて作品を作る場面でも、力を発揮した。魚を三角形のカードを何枚使って作ったかを聞くと、隣の子が A の魚を紹介した。それをきっかけに、A の魚で、色や数をクラスで確認することにつながった。

この事例より、A が得意な図形が Content だったことで、A が活動に参加するきっかけが生まれ、作品作りの面白さや友だちの関わりによってさらに自信を持って参加していった。同様の傾向が、他の児童にも見られた。

##### 【視点 3】円滑な英語への接続

本場面は、授業の導入時に、児童が黄緑という未知の単語と出会う際の教師とのやり取りである。

T: What color is it? (黄緑色の△を提示して)  
 C: Green.  
 T: Green. Yes, Yes. Green. 日本語だとこれ何色?  
 C: 緑～。  
 T: 緑。他は?  
 C: 黄緑。  
 T: あ、黄緑。そうだね。黄緑言い方わかる?  
 C: Light ~blue.  
 学担: あ分かるんだ。  
 T: Light blue, yes, あ、Light blue じゃないね。  
 Light?  
 C: Light green.  
 T: Yes, Light green. Nice.

ここでは、「黄緑」という未習単語を、既の習「Light blue」という言葉から、元の色を薄めた色のときに「Light」が付くかもしれないと色の共通点から言葉を推測して、「Light green」を学習することができた。また、振り返りでは、「トライアングル」と書く児童もおり、形遊びを通して、たくさん表現に親しんだり、実物と触れ合ったりしたことが学習の理解や定着が深まったと分析した。

##### 4.2 実践 2 のデザインと分析【視点 2・3】

仙台市 B 校 5 年生 3 クラスで New Horizon Elementary 5 Unit3「What do you want to study?」(8 時間扱い)の授業をデザインし、実践した。CLIL は学習目標を「世界の授業について考えよう」とした Over the Horizon (8 時目)で行った。英語を苦手とする児童がおり、特に「話すこと」への苦手意識が高く、ある児童は、発表の際に泣いてしまうほどだった。そこでどの子も抵抗感なく参加できるよう、多くの児童が好きだった図工を Content とした。本時は、学習目標との関連から、世界のアートの授業やユネスコの取組みを参考に「ちぎり絵」と「Eco-Art」を融合し、手で破った新聞紙が何に見えるかを自分または友達と考え、交流する活動を行った。表は 4Cs と授業内容との関連、授業内で予想される思考の要素をまとめたものである(表 4)。

表 4 本時の授業と 4Cs との関連

| 4Cs                   | 授業内容  |
|-----------------------|---|
| Content               | 図工(工作・鑑賞)   |
| Communication         | 色,数,形,生き物等の名称を使ったやり取り   |
| Cognition             | CDF1 分類(分類,結び付け)<br>CDF3 描写(描写,ラベル・名づけ)<br>CDF6 探究(探求,見当,他の視点に立つ) |
| Community/<br>Culture | Eco-Art について知る。<br>作品を見せ合い、何に見えるかをグループで話し合う。                      |

【視点2】思考の広がりや深まり

この実践では、アートをテーマにした活動に CDFs 「分類・描写・探究」の特徴的な思考が見られ、それらをもとに教師が英語につながることができた。

子ども達は作品を見せ合ったり、話したりしながら夢中で制作に取り組んでいた。児童 B は英語の授業は楽しいと感じているが、スピーチなどに苦手意識のある児童で、普段自分から話しかけることはあまりなかった。そんな B が、自分の作品が何に見えるか見当を付けられずにいると、自ら隣の子に作品を回しながら「何に見える?」と声をかけた。友達が「ライオン!ここが頭で…」とアイデアをもらうと、「あ、ほんとだ!」と納得し、満足そうに他の作品も一緒に考える姿が見られた。

上記のように、多くのグループで作品の見え方を分類、ラベル・名づけ、作品への可能性を探究するやり取りがあり、デザインで想定した思考の要素が働いていた。

また、作品を見せ合う場面では、たくさんのグループで、「すごい!」や「〇〇がいいね」、「上手だね」と互いに賞賛し合う声が聞こえ、デザインの時点では想定していなかった CDF4 評価の「賞賛」も観察することができ、様々な思考へと展開していることが分かった。

エピソードから【視点1】の学習の参加が保障され、思考を働かせて作った「作品」が他者から賞賛されたり、自分では気付けなかった良さを知ったりすることで、子ども達の関係を深めたり、自信に繋がったりしていることが観察から見取れた。

【視点3】円滑な英語への接続

授業の中で、子ども達のやり取りは日本語が多くなるが、教師が英語で質問することで、英語の応答を引き出したり、リキャストすること(学習者の発言を自然な会話の中でさりげなく言い直すこと)で、日本語に対応する英語に触れる機会を増やしたりした。

T:What's this?  
 C<sub>1</sub>:Cute human! (作者)  
 C:Cute human? (複数人)  
 C<sub>2</sub>:オリジナルか~!  
 T:オリジナルデザインだそうです。  
 C:お~! (複数人)  
 T:ここは何?Hu? に見える。  
 C<sub>1</sub>:ここは、え~髪の毛。  
 T/ALT:Hair, Hair. Eyes, Nose, Mouth.  
 T:Green nose なんだね, Cute human は。  
 C:Green nose. (複数人)

4.3 実践3のデザインと分析【視点2・3】

仙台市 A 校 5 年生 3 クラスを対象に New Horizon Elementary 5 Unit 6「What would you like?」(8 時間扱い)の実践を行った。CLIL は Over the Horizon (6 時目)で実施し、学習目標は「世界の食文化について考えよう」であった。本時は、世界の3大米の生産量、稲の長さ、炊き上がりの粘り気の違い、さらに資料から読み取れる情報を班で一つ選んで表にまとめ、全体で共有する授業をした。A 校の 5 年生は、総合的な学習で稲を育てたり、一人一人テーマを設定して調べ学習を行ったりと、お米について学習を深めているため、既存の知識が高く、持っている知識にも違いがある。さらに 5 年生では、社会科や家庭科で米を扱った単元があることから、A 校の児童にとって、米はとてども馴染み深く、興味や関心が高い教材であること、そして学習目標とも相性が良いことも踏まえて、内容(Content)を設定した。

実践 1 や 2 と異なり、資料から情報を読み取る社会や総合的な学習の時間に近い活動を主に取り扱うため、予想される Cognition の CDFs も「定義」や「判断」などが予想された。表は 4Cs と授業内容との関連、授業内で予想される思考の要素をまとめたものである(表 5)。

表 5 本時の授業と CLIL の 4Cs との関連

| 4Cs               | 授業内容  |
|-------------------|---|
| Content           | 社会・総合(米作り)・家庭科  |
| Communication     | 色,数,国名,形容詞(反対語と対で)の表現の活用  |
| Cognition         | CDF1 分類 (分類, 結び付け)<br>CDF2 定義 (定義, 特定, 特徴付け)<br>CDF4 評価 (評価, 判断, 賞賛)<br>CDF6 探究 (探求, 見当, 他の視点に立つ) |
| Community Culture | 世界で食べられている米についての特徴について考え、グループで話し合い、全体で意見の交換をする。   |

【視点2】思考の広がりや深まり

各グループに 2 種類のお米と違いが分かる写真付きの資料を渡し、ワークシートを完成させる課題を出した。

どのクラスでも、粒について書かれた資料を見ながら「こっちがインディカ米でしょ。」と予想する姿や、教師からお米を袋から「出していいよ。」と言われると、2 種類のお米を触りながら、「これインディカだ。分かる!」と分類する姿が観察できた。多くの児童は見た目の違いで判断しようとしていたが、中には、匂いや味で違いを感じ取ろうとしている児童も見受けられた。

この記録から、様々な情報が載っている資料を根拠に分類したり、五感を使って形から特徴を見つけたりとデザインで想定した CDFs の「分類・定義・評価・探究」の思考が働いていたことが分析で明らかになった。

### 【視点3】円滑な英語への接続

班でまとめたことを全体で共有する際には、教師がリキャストして、日本語を英語へと繋いでいった。

T: How tall インディカ米?  
 C: 高い。  
 T: 高い。High? High?  
 C: High./ハイ。High./ハイ。(言葉の音で遊んでいる)  
 T: ハイ。High. (一緒に楽しんでいる) ジャポニカ米?  
 C: 低い。  
 T: Short.  
 C: Short./ down down down. (低いを英語で表現しようとしている)  
 T: ジャポニカ米は?  
 C: High. (リキャストしたことが反映されている)  
 T: High. 粘り気ってなんて言うんだっけ?  
 C: …。米  
 T: べたべたする。Sticky. Sticky.  
 C: Sticky. Sticky.  
 C: スティッチー。(音の似ているものを見つけている)  
 C: 僕スティッチー。  
 T: インディカ米は粘りが弱いのか強いのか?  
 C: 粘りが弱い。  
 T: A little bit sticky. How about ジャポニカ米は?  
 C: 粘り気が強い。  
 T: Strongly sticky. (リキャストしている)

上記の記録から、米の丈について聞くと「High」と答えたり、炊き上がりの粘り気について教えると、「Sticky.」を使ったりしているように、資料を用いて調べたことやそれぞれの思いを英語で表現しようとしていた。

またリキャストにより、5年生で学習しない単語でも、響きの似ている単語を探して遊び感覚で反復する姿や、児童の振り返りでは「粘り気があるときは、スティッキということが分かった。」と書くなど、英単語の意味をコンテクストの中で理解する様子が明らかになった。

## 5. 考察

CLIL の内容(Content)の柱を意識して、子ども達の興味関心の高いものや既存の知識の多いものを用いて英語学習を行うことで、子ども達が英語そのものよりも学習内容に集中し、夢中になる時間を増やせることが明らかになった。さらに CLIL のコミュニケーションと協学の柱を意識し、3~4人のグループ学習を取り入れたことで、友達との助け合いによっても学習の参加が保障されたり、普段は関わらない児童同士の関係が構築されたりする場面が見受けられた。

研究によって、参加の保証や苦手意識、言語不安の軽減のためには、内容の設定や素材の準備が重要な役割を担っていることが分かった。実践では、図工などの創造や表現、鑑賞が中心の実技的な教科内容と社会科や総合などの調べ学習や情報収集、分析の機会が多い教科的内容を扱い、それぞれの教科内容によって展開される思考の違いを明らかにできたと考えている。

実践1, 2(図工中心)の授業では、語彙数が少ない中学年でも幼少期から培ってきた制作や鑑賞の経験を生かし、活動への見通しも持ちやすい。図工では、表現だけでなく鑑賞も学習の一つであるため、多様な参加の仕方が認められ、初めて CLIL を取り入れる場合などには取り掛かりやすい Content ではないだろうか。またアートの授業は、自由に発想や思考ができ、自分らしさが発揮されやすくなるため、学習に抵抗感を持っている児童を含め、多くの参加や発言が見られた。それにより、英語への接続や思考の価値付けが容易になっていた。

一方で、CLIL に慣れ、語彙数や表現、学習内容が多い高学年では、情報を読み取り、活用するような教科を扱うことで、子どもから出てくる表現がその内容に焦点化されやすくなり、やり取りや思考が予測しやすく、学ばせたい表現にねらいを持った授業も展開できると感じた。その際に、子どもの実態から、既存の知識や興味、強みなどをどのように発揮できるのか丁寧に観察し、デザインから学びの見取りまで繋げていくことが重要である。

本研究では、CLILの授業のデザインによって、一人一人が自分らしく参加する中で、学びを価値付けすることができた。今後は、さらに多様な思考が見られるような授業のデザインや実践に取り組んでいきたい。

## 引用・参考文献

- 1) [https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.nier.go.jp%2F21chousakekkahoukoku%2Ffactsheet%2Fdata%2F21p\\_401.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK](https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.nier.go.jp%2F21chousakekkahoukoku%2Ffactsheet%2Fdata%2F21p_401.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK) (2023年1月25日現在)
- 2) 和泉伸一: フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業 生徒の主体性を伸ばす授業の提案, アルク, 73, 75, 78, 80 (2016年)
- 3) Puffer, D.: Cognitive Discourse Function, Conceptualising Integration in CLIL and Multilingual Education, Multilingual Matters, 29-54 (2016年)
- 4) 柏木賀津子・伊藤由紀子: 小中学校で取り組むはじめての CLIL 授業づくり, 大修館書店, 17 (2020年)

## 自分らしさを発揮し仲間と楽しめる授業の研究

### —小学校外国語における CLIL の活用を通して—

村山 愛実(21048)

**要旨** 令和2年度より小学校中学年で外国語活動、高学年は教科として外国語が始まったが、令和3年度の全国学力・学習状況調査では、約3割の児童が小学校段階で英語に苦手意識や不安を抱いていることが分かった。本課題に対し、英語を他教科と連携させ、学習者の協働的な学びを重視している CLIL を用いて、一人一人が自分らしく参加する中で学びを評価できる授業について考えた。

実践は3年生と5年生で行い、単元終末に CLIL を取り入れた。授業デザインでは、CLIL の特徴である 4Cs(Content, Communication, Cognition, Community/ Culture の4つのC)を枠組みとした。Content は図工や総合、社会科と関連させ、Cognition は、CDFs(Cognitive Discourse Functions)から、子ども達の思考を予想してデザインした。

各実践を記録・分析すると、全ての実践で、学習への参加の保障、思考の広がりや深まり、円滑な英語への接続という3つの成果が見られた。特に思考は、組み合わせる教科内容によって展開される思考が異なることが明らかになり、それらをCDFsで分析していった。

キーワード: 小学校外国語, CLIL, CDFs, 参加の保障,

ユニット指導教員(◎ユニット長, ○副ユニット長)

◎金田裕子, 鈴木渉, 齊藤千映美, 本田伊克, 吉村敏之, 越中康治, 澤田茂実